

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ジャガー人間石彫発見顛末記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008352

ジャガー人間石彫発見顛末記

関 雄二 (国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問)

国際協力機構 (JICA) の仕事で首都のリマに出かけた8月上旬、携帯電話が鳴った。7月の初めより発掘を行っていたパコパンバ遺跡で石彫が出たという。去年もそうだが、私が留守をするといつもなにか重大なことが起きる (巻頭エッセイ参照)。リマからの帰路、北海岸のチクラヨ市で行われた国際会議での発表も早々に引き上げ、車を遺跡に走らせた。舗装道路のおかげで、昔9時間かかった道も今や5時間もあればゆうに着く。

日本学術振興会の支援による科学研究費補助金基盤研究 (S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」という長い名前を冠したプロジェクトも今年で3年になる。このプロジェクトを含め、ここ9年ほどは、ペルー北高地の海拔2500mに位置するパコパンバという神殿を発掘している (図1)。アンデス考古学上、形成期 (紀元前3000年~西暦紀元前後) とよばれる時代の後半に祭祀活動が展開されていた遺跡である。祭祀活動は形成期を特徴付けるのだが、最近では、形成期の初期は平等性の高い社会であり、後半に社会的格差が生じると考えられるようになってきた。その意味で、昨年発見した金製リングや銀製針を副葬した墓は、神殿を支えていた人々の間で社会

的地位に差が生まれていたことを示唆する重要な証拠といえよう (チャスキ46号参照)。こうした流れからすると、今回の石彫の発見はじつに筋書きにびたりと収まる。これについては、後でゆくりと説明しよう。

今は便利な時代である。デジタル画像を事前に送ってもらい、ある程度の情報は入手していた。しかし、石彫が発掘で出土することは減多になく、団員の勘違いということもある。やはり自分の目で確かめないといけない。到着した翌日、宿舎のある村から20分ほどかけて山上にある遺跡に上ると、枯れかかった草に囲まれた褐色の発掘区と対照的な色合いを見せるビニールの塊が目に入ってきた。思ったよりも大きそうだ。作業員は、気を利かせてすぐにビニールの覆いを持ち上げた。細長い石の塊が水平方向に伸びている。石彫だとするならば、横たわっているのか、倒されたに違いない。確かに彫り線も見える。

この地区を担当するペルー人考古学者マウロ君がやってきて説明を始めた。半分は彫り残した発掘区の断面に埋もれているが、見えているのは右半身のようだ (図3)。肩から腕が下方に伸び、肘は曲がって土の中に潜っている。腰のあたりに帯が見える。大きさは1.5m

ほどであるという。首の窪みもあるようだが、肝心の頭部は、石に覆われていて見にくい。それでも肩が上に見えるところから、うつぶせ状態であることが推測できた。いずれにしても紛れもない石彫であるし、保存状態もよさそうだ。気分が高揚した。こと発掘に関して慎重な私は、団員が語る層位や建築の解釈にすぐに首を縦に振ることはしないようにしている。自分の目で確かめ、納得するまで担当者と議論を重ねる。それを知ってか、マウロ君は「信じてもらえましたか」と笑顔で問いかけてきた。何もいわずにうなずくばかりであった。

石彫が発見された場所は、これまで手をつけてこなかった第1基壇と第2基壇の間に設けられた発掘区である (図2)。遺跡は山上の緩やかな尾根を利用した3段の大きな基壇より構成されていたので、これらの基壇間を結ぶ階段がどこかにはあるはずである。最上段の第3基壇に上るための階段の一部はすでに2006年に発見していたのだが、下方の基壇間をつなぐ階段は未確認であった。今年はそれを見つけようとしていた。

パコパンバの建築は、明確な中心軸に沿って左右対称に築かれることが判明していたので、その中心軸を伸ばし

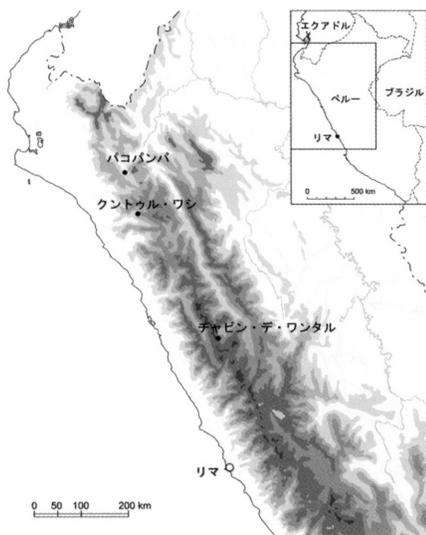


図1 パコパンバ遺跡の位置

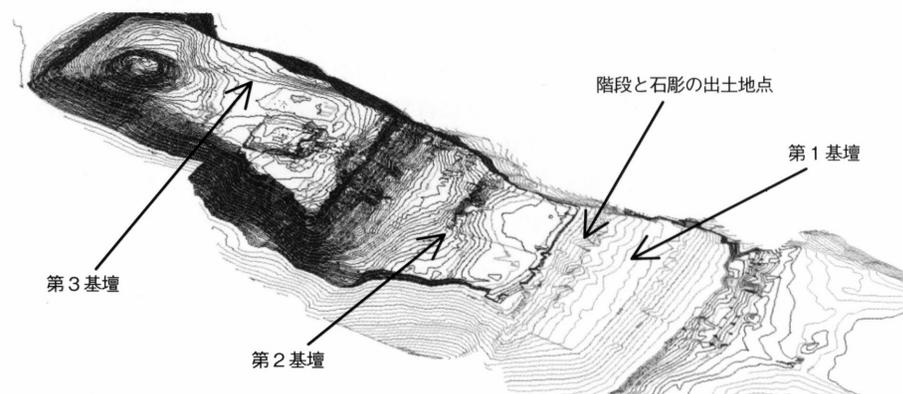


図2 石彫の出土場所

ていけば、階段は見つかるはずである。ところが階段らしき痕跡はなかなか出てこない。予想以上に階段上部の崩落が激しく、ステップとして使われているであろう切石がすべて失われているようだ。階段上部はあきらめた方がよかろうと、下段をねらうことにした。最終的に、下段部分はかなりよい保存状態で出土した。

しかし、問題は、この下段のステップが姿を見せる前に、大量の石が現れたことである。階段のステップに使用していた石よりも小さく、礫と呼んだ方がよいのかもしれない。この礫層は傾斜しており、下の段、すなわち第1基壇の床面が近づくと、その角度は緩やかになっていく。この大量の礫層に包まれるように石彫が出土したのである(図4)。ただちに発掘区の拡張計画を立てることにした。ともかく、上下左右に発掘区を広げ、この礫層の正体を暴くことになった。石彫の取り上げはその後に行うことにした。

およそ2週間の拡張作業の結果、大変興味深いことがわかった。この礫層は、第1基壇全体を覆っているわけではなく、階段に近い場所に限定されていること。そしてその端には比較的大きな石が乱雑に置かれ、どうやらその石によって礫が止まっていることなどである。つまり、この礫は階段の上の方から堆積しているが、崩落による自然堆積ではなく、人為的に投げ込まれ、また積み上げられた可能性が高いことになる。

問題はその時期である。これも比較的容易に判明した。石彫周囲の礫を除去しているうちに大量のミニチュア土器が出土したからである(図5)。しかも神殿が機能していた形成期の土器とはずいぶんと違う。この土器なら見たことがある。そうだ、第3基壇に設けられた半地下式の広場を埋める土の中から出てきた土器にそっくりだ。

半地下式広場は、おそくとも紀元前300年頃までにはその機能を失い、放棄されるが、紀元後200年頃、前期カハマルカ期と呼ばれる時代に再び人々の篤い信仰の対象となり、形成期の時代に広場の中央に築かれた小基壇の周囲に大量の奉納品を捧げている。その奉納品が赤褐色のミニチュア壺なのである。ちなみに巻頭エッセイで述べた盗難にあった土器とは、このミニチュア壺のことである。最終的に、半地下式広場は同じ前期カハマルカ期の人々が積み上げた大量の土と礫によって完全に封印されてしまう。

石彫が見つかった階段でも同じようなことが起きたのであろう。礫層は階段自体を意図的に封印するためのものであったと考えている。したがって、そこに埋もれていた石彫も同じような脈絡に置いた方がよい。実際に、石彫の頭部付近でミニチュア土器の奉納が認められるだけでなく、何かを燃やしたような痕跡も見つかった。石彫は意図的に倒され、いや倒れたのが形成期であってもよいのだが、ともかく最終的には意図的にうつぶせにして、頭部

付近で奉納や火の儀礼を行ったということになろうか。しかもうつぶせにした後、頭部だけに大型の石を積んでいることから、石彫のパワーを封じ込める意図が感じられる。

大型の石彫が原位置を保った形で発見されることはまれである。多くの場合、調査以前から地表面に露出しているか、崩れた堆積層の中から発見されることが多い。クントゥル・ワシ遺跡の場合も、半地下式広場を昇降する階段のステップで出土した、高浮き彫りのジャガー顔面像を除けば、丸彫りの石彫は、すでになかなか前から地表に露出していたか、原位置を特定できないものばかりなのである。

ただし、原位置と言っても、パコパンパの石彫の場合、前期カハマルカ期における原位置と言った方が正しい。というのも石彫や礫層は、形成期の時代の床面より1m近くも上に位置するからである(図10)。では形成期の頃には、この石彫はどこにあったのであろうか。今のところ考古学的証拠は脆弱と言われても仕方がないが、石彫表面に傷があまり見られず、保存状態が良好であること、さらになかなか重量があることなどを考えると、上の段すなわち第2基壇上から落とされたとは考えにくい。しかも石彫の出土位置は、遺跡全体を貫く中心軸上にある。こうした点から、元来、階段の登り口、ほぼ中央に据えられていたのを前期カハマルカ期の人々が掘りあげ、改めて封印したと考えるのが妥当であろう。もちろん前期



図3 発掘区の断面に埋もれる石彫



図4 階段を封印した礫群に埋もれる石彫

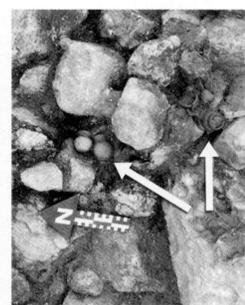


図5 石彫の周囲で前期カハマルカ期のミニチュア土器(矢印)が出土

カハマルカ期に彫った石彫ではないかという反論も成り立つ。この問いに答えるためには図像の説明が必要となる。そこで話を発掘現場に戻そう。

石彫周囲の奉納品や、頭部に積まれた石を取り除き、いよいよ石彫を裏返す日がやって来た。仰向けに寝かせるために、脇に柔らかい土を敷き、ビデオ撮影をしながら作業員7名で石彫を持ちあげた(図6)。長い間粘土質の暗褐色土と接していた正面部分は、石灰岩とは思えぬほどどす黒く見えた。気になる顔に注目する。間違いのない形成期だ。大きく開いた口に牙が見える(図7)。ジャガー的要素の一つである。思わず作業員らと握手し、歓声をあげた。至近距離から改めて確かめる。目や鼻は人間的である。肘を曲げた前腕は胸に伸び、両手をしっかりと組んでいる。へそもあるようだ。腰には帯が見えるが、ちょうど股のあたりで三角になっている。禪であろう。

形成期の石彫はクントゥル・ワシ遺跡でよく見てきた。胴体は人間で、裸で禪を身につけるものが丸彫りでは多い。しかも牙が出ている。一方でカハ

マルカ期の石彫はワカロマでの発掘や、3年かけたカハマルカ盆地の一般調査で目にしてきた。ジャガー自体をデフォルメした図像が多く、人間の顔も素朴で、ジャガーと組み合わせさせた石彫は少ない。今回の石彫はまず形成期と判断してよいように思う。

さてこの図像の持つ意味はどう解釈したらよいのであろうか。これには土器の図像分析が参考になる。パコパンバ遺跡はI期(前1200～前800年)とII期(前800～前500年)に分かれ、双方の土器は全く異なる。I期の土器は、鉢が目立ち、外側に開いた鉢の外壁には刻線で紋様が描かれる。幾何学文様が大半だが、なかにはジャガー、猛禽類、ヘビなどの動物や人間の顔が彫られる場合もある。これらの要素は単独で出現するか、あるいは複数の要素の組み合わせであったとしても、頭部が選ばれるだけで、全身像はほとんどない。仮に全身像があったとしても動物を題材にしたものがほとんどである。

ところが、II期になると土器のみならず、骨器でも全身を表現するケースが出てくる。ジャガーと人間との組み

合わせもある。こうした傾向を考慮してみると、今回見つかったジャガー的属性と人間とが組み合わせさせた石彫はII期の図像表現に近いことになる。実際、階段が機能していた最後の時期はII期なので、その時に石彫があったと考えるのは理にかなっている。もっとも土器と違って石彫は石であるが故に持続性があるので、I期に彫られたものがII期に再利用されたと考えてもおかしくはない。だからこそ他の遺物における図像表現と比較したわけだ。こうして石彫はII期に作られたと考えるに至ったのである。

ではこの時期に、人間の身体がまるまる登場するのはどうしてだろうか。この点は、アメリカ人考古学者のジョン・リックが興味深い仮説を提示している。パコパンバ遺跡とほぼ同時期と考えられるチャビン・デ・ワンタル遺跡からは、大量の石彫が出土している。近年その遺跡で調査を続けるリックは、人間と動物の属性が組み合わせさせた図像を後期ととらえ、宗教的指導者層の出現時期と関連させた。すなわち、宗教的指導者が権力を握る過程で、動物



図6 石彫を裏返す。



図7 石彫上半身のアップ



図8 地面に残った図像から型をとった。

の霊力を操る能力、あるいは動物に変身する能力を周知させるためにこうした図像を彫り始めたと考えたのである。パコパンバにも適用できる可能性があると考えている。パコパンバでは、副葬品や墓の構造などから、II期に社会的差異が顕在化したと考えられるからである。冒頭でびたりと当てはまると言ったのは、この点である。

ただし、正確を期すならば、人間とジャガーが組み合わさった図像自体の起源はもう少し古くてもよい。たとえば、クントゥル・ワシ遺跡では、パコパンバ遺跡でいうところのI期に相当するイドロ期に、すでにジャガー人間の全身レリーフが出土している。とはいえ全身像の石彫となると、次のクントゥル・ワシ期を待たねばならない。パコパンバII期と同時代である。

石に彫ると言うことはイメージの固定化につながると指摘したのは、埼玉大学の加藤泰建副学長であるが、その点も権力形成とその維持という観点から見ると大変興味深い指摘である。図像の問題は、地域差を含め、今後検討していきたい。

こうして石彫の調査は一段落する。あとは、石彫表面の土を竹串などで落とす作業くらいである(図9)。そのときふと気付いたが、元々石彫があった場所に、顔と胴体の凹凸が反転してきれいに残っていたのである(図8)。これなら型がとれそうだ。オリジナルの石彫から型をとることは、使用する材料も含め、専門的な知識が必要となるであろうし、文化省から許可をとる必要

がある。一方で、土に残った像から型をとるのは失敗しても何ら問題はない。

海岸のチクラ-ヨ市から歯科用の石膏を取り寄せ、試すことにした。1.5mもあるので、折れないように、芯として鉄製の棒を2本入れ、金網でも補強した。1週間ほどかけて取り上げてみると、上々の出来映えである。もちろん立体的なレプリカではなく、正面、しかも反転部分が残った箇所限定されるが、これも、将来建設する予定のビジターセンターに飾ることを想定しての作業である。

さらに拓本にも挑戦した。私が学生時代、初めてアンデス調査に参加した折、恩師の丑野毅先生(現東京国際大学名誉教授)が、東大の資料館(現博物館)で1晩以上かけて作られた拓本墨が代々受け継がれ、パコパンバに持ち込まれている。そのときに母からももらった絹の端切れで作ったタンポンもまだある。問題は画仙紙である。1.5mの石彫をとるほど大型の画仙紙を準備していなかった。幸い、娘が学生最後の夏休みを利用してパコパンバまで来ることが決まっていたので、これも無事解決。

あとはこれだけ大きなしかも高浮き彫りで、凹凸のある立体的な像の拓本がとれるかである。娘や作業員と何度か試みたが、予想以上に風が強く、湿らせて付着させた画仙紙も簡単に浮き上がってしまう。しかも凹凸部分では画仙紙がすぐに破れる。それでも2日かけてなんとか輪郭を押さえることに成功した。正直言って拓本をとってよかったと思っている。目視では気付か

なかった傾いだ頭部が明瞭に現れたからである。

拓本を改めて眺め、あれっと思った。ひょっとしたらジャガーというよりもサルに似ているかもしれない。もう現地の新聞では1面を使った記事が出ている(図11)。日本でもNHKを始め新聞各社が発見を伝えている。ジャガー人間だと。今さら撤回はできない。でも尻尾はないから、当分ジャガー人間でいきます。



関 雄二(せき・ゆうじ)

1956年東京生まれ。国立民族学博物館研究戦略センター教授ならびに総合研究大学院大学教授。専攻はアンデス考古学、文化人類学。1979年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査を行い、アンデス文明の成立と変容を追究するかわら、文化遺産の保全と開発の問題にも取り組む。単著として『アンデスの考古学』(同成社)、『古代アンデス 権力の考古学』(京都大学学術出版会)、共編書として『文明の創造力』(角川書店)、『アメリカ大陸古代文明事典』(岩波書店)、『古代アンデス 神殿から始まる文明』(朝日新聞社)がある。



図9 石彫の清掃を慎重に行う。



図10 階段と石彫の位置関係



図11 村人への説明会でマウロ君が熱く語りました。